

徳永昌弘著

『二〇世紀ロシアの開発と環境』

(北海道大学出版会、二〇一四年、三三八頁)

白井陽一郎

シベリア開発を事例に、ソビエト・ロシアの歴史を重厚に描き出した地域研究の好著である。日本のロシア研究の、まさに厚みを感じさせる一冊であった。現在のロシアを理解するには、ソビエト社会主義時代との連続性を把握しておく必要がある。本書が示すように、シベリア開発は一つのポイントになる。これを事例にソビエト・ロシアの二つの近代化プロジェクトを調べ上げ、その意味を考え抜いたのが本書である。

ソビエトからロシアへの変遷には、容易に想像できるように開発と環境のディレンマが一貫して存在した。ソビエト社会主義からロシア資本主義への大転換に通底する——環境虐殺(エコサイド)とまで言われた——大規模な公害に、本書は近代化プロジェクトの失敗という次元から迫ろうとする。これを観念論に陥らず実証的に進めることを可能にしたのが、エコロジー近代化論であった。不毛であったと著者の断ずるかつての社会主義対資本主義の体制イデオロギー論争を反省的に振り返ったのち、両体制間に連続する近代化の

失敗を数量的にとらえるべく、エコロジー近代化論に即した統計データの解析が示される。本書オリジナルの貢献がここにある。

ただ、本書の拠って立つディシプリンは政治経済学であり、その重心は経済学分析におかれ、移行期経済論と環境経済論への理論的寄与が最終目的だとされる。そのため国際政治学会の学会誌で本書を取り上げるにあたっては、フォーカスの当て方に工夫が必要となる。本書の本筋からズレてしまっておそれないが、政治研究に貢献しうる面に引きつけながら紹介することにした。

序章で問題意識と方法論が提示されたのち、本書は大きく二部に分けられる。第一部では、まず公害・環境問題へのアプローチ法が検討され、それをベースにソビエト社会主義による工業化を近代化プロジェクトの失敗と理解する見方が提起される。そのポイントが後背地シベリア開発である。第一部の最後にシベリア開発の全体像が示され、ソビエト社会主義の工業化にとってこれがいかに重要であったか、またロシア資本主義へ移行したのちに陥った資源依存経済をいかに準備したかが、ここで概括的に、しかし有無を言わせぬふんだんな統計データでもって論じられる。

公害・環境問題にアプローチすることによって、ソビエト社会主義とロシア資本主義の二つの近代化プロジェクトの連続がより良く見えてくるとする本書の主張は、シンプルで説得力がある。その説得力を高めているのが、上述のように本書の採用するエコロジー近代化論である。経済成長にともなう環境負荷のかかり方(その増減)を数量的にとらえるこのアプローチは、経済体制の如何を問わず適

用できる。公害・環境問題が経済体制論（もしくはイデオロギー論争）の道具に使われてしまったこれまでの経緯について、また逆に両体制の差異を見えなくしてしまった環境収斂論の不十分さについて、本書第一部のレビューは環境・政治論に関心をもつ読者に一読の価値ありといいたい。そのレビューのあとに簡潔にまとめられたエコロジー近代化論は、公害・環境問題へのアプローチが近代化プロジェクトの批判的考察になくてはならないものであることを十分に納得させてくれる。

第一部での理論枠組とアプローチ法の総論的な提示を受けて、第二部では詳細な事例研究が展開される。シベリア開発こそソビエト社会主義の工業化の成否をかけた一大プロジェクトであったと認識する著者は、さらにフォーカスをしぼりアンガラ川流域開発の歴史に奥深く入り込む。これがシベリアの真珠と謳われたバイカル湖の汚染を引き起こす一因となっていくのであるが、著者はその直接の汚染者、バイカリスト・セルロース製紙コンビナートに分析の照準を合わせる。ソビエト社会主義からベレストロイカ時代を経てロシア資本主義へと大きく転換していく政治の巨大な流れに翻弄されたこのバイカリスト工場のドラマが（とくに第6章と第7章）、本書第二部の白眉となる。

本書では社会主義企業の特徴を簡潔に説明してくれているが（それが門外漢にはすこぶる助かる）、重化学工業化をアメリカ資本主義に負けず迅速に実現するためにソビエト社会主義を選んだ道、それが地域産業複合体という巨大企業の創設であった。地域社会の公

的インフラをも担う巨大企業を育てあげようとするこの路線は、やがてその最たる例のバイカリスト工場を決してつぶすことのできない生活雇用基盤に仕立て上げてしまった。これが資本主義ロシアに巨大な負の遺産となって引き継がれる。時代遅れの巨大汚染企業を最終的に事業停止とするまでの、何次にもわたる事業転換計画失敗の事情の詳細な分析は、本書で描かれる歴史ドラマのもっとも引き込まれる場面であった。

バイカル問題の背景、登場、深化、転回と続く第二部のまさに大河ドラマのような歴史記述は、しかし特筆すべきすぐれた統計分析に依拠したものである。その学術的貢献は大きい。本書の指摘から容易に想像できるように、ソビエト経済に取り組む歴史家には、問題だらけの統計データという難関が立ちふさがる。しかもロシアになつてからの統計との非連続性という難問がこれに加わる。本書において著者は、利用できる資料を残しできないものは捨て、学術的正確性にはところどころ妥協しつつそれは真摯に読者に開示して、使えるところまでぎりぎりの精査をなしたうえで統計分析を進める。シベリア開発からアンガラ川流域開発までの、マクロのそしてミクロの経済分析は、まさに圧巻である。著者の経済史研究の力量は、ソビエト・ロシアの経済史研究では当然の水準なのであるうか。あたかも天文学者が限られたデータから数億光年先の星々の位置関係や生誕・消滅を探るかのよう、公文書館の所属史料や関係者の内部文書に当たり、ソビエト時代の「問題だらけ」の資料を慎重に精査していく著者の実証精神は、本書の学術書としてのクオリ

ティをきわめて高いものにしていく。

ただし、第一部と第二部の関係という点でいうと、それは理論の提示とその実証という関係にあるというには、弱いものがある。第一部を読み込むかぎり、エコロジー近代化論が本書の中心的な分析アプローチであったはずである。しかしその理論枠組は、第二部のバイカル問題では後景に退いてしまう。統計によるその分析も、例示的指摘の域を出ない。エコロジー近代化論に依拠した実証分析によつて、たとえばベレストロイカ以前と以後で、あるいはソビエト崩壊以前と以後で、いかなる環境パフォーマンスの差異が現出していたのかについて、アンガラ川流域開発を事例に体系的に検討されたわけではない。第一部(第3章)とは異なり、第二部では例示的部分的検討に終始している感が否めない。

とはいえ、バイカリスク工場をめぐるバイカル湖保護の闘いにフォーカスをあてた第二部の考察は、ソビエト・ロシア政治のみならず広く環境政治一般に関心をもつ本学会員を惹きつけること、まちがいない。バイカル湖保護へ向けて農業省と科学アカデミーのエキスパートがゴスプラン(ソ連国家計画委員会)——ソビエト・レジムの最も奥深いところ——にまで持ち込んだ開発推進派との闘いは、堅固に構築された環境言説連合の敗北事例であるし、ベレストロイカ期に解禁された環境団体が体制転換に寄与したのちブーチン時代に力を削がれてしまったとの指摘は、権威主義体制下の環境運動論という観点から興味深いものがあるし、資本主義転換後のバイカリスク工場利権化にもなう連邦・地方間のつばぜりあいはいは、

ロシア版マルチレベル・ガバナンスの失敗例だともいえよう。さらに加えて、ソビエトからロシアへ一貫して続く一般市民の環境意識の低さやローカル企業の法軽視・利権志向の態度を活写する第二部の記述は、ロシア的なるものありありとした認識を読者に与えてくれる。経済体制論の不毛なイデオロギー論争と安易な環境収斂論のいづれにも組みしないとすると本書の、環境政治研究に対する寄与には意義深いものがある。

ただそうであるがゆえに、環境ガバナンスとエコロジー近代化の関係について、アンガラ川流域開発をめぐるソビエト・ロシア環境政治の経験から何が言えるのか、著者自身の理論的総括が欲しいところであった。本書でこれは問題提起に終わる。環境ガバナンスの強化を実現するための環境政策能力向上に資する制度をいかに構築するかは、他国・地域との比較分析を通じて考察していく必要があると著者はいう。もちろんである。その比較を進めていく上で、本書の仕事は実に大きい。

だからこそ、もう一歩踏み込んだ制度論を期待してしまう一読者の無分別を許してもらいたい。本書射程外の傍論にすぎないが、次の点を指摘しておきたい。経済体制の相違は政治体制の差異にも現れるはずであり、その政治体制のあり方が環境ガバナンスの制度アーキテクチャーを強く規定する以上、エコロジー近代化論を経済体制論から切り離すことはできない。本書が高い実証性をもって明らかにしたソビエト時代のエコロジー近代化へ向けた試み(汚染者負担原則的なものの導入)や、ロシア時代に移ってからの再チャレ

ンジ（汚染課徴金の導入）は、理論的考察を深める絶好の失敗例といえよう。

とはいえ、本書はまずもってロシア地域研究のすぐれた歴史書である。そしてそうであるがゆえに、クオリティの高い実証的な環境政治の書にもなりえている。たとえ移行期経済論や環境経済論への理論的寄与を目指した研究書だとしても、エコロジー近代化を閉じてしまったソビエト・ロシアの事例から学ぶことのできる政治研究者は多いはずだ。本書は何といつても、権威主義体制下の環境ガバナンスについて実に多くのことを教えてくれるのである。環境政治の研究者にこそ、本書の通読を薦めたい。

（うすい よういちろう）

新潟国際情報大学